

幸せを願う

深海 亮・著

二巻、終了後のお話です。

珠華は杏樹と共に馬車を降り、玉環が営む店の前に立った。

「珠華様、お帰りなさいませ」

「久しぶりね、玉環」

玉環が出迎えてくれると、珠華は嬉しそうに頬を綻ばせた。思わず抱き着きそうになったが、後ろに控えている杏樹が目を光らせているのでやめておく。杏樹は昔も今も礼儀作法にいちいち煩い。

「向こうの茶葉を持ってきたの。あと、香辛料も数種類あるわ」

「まあ、ありがとうございます。ささ、どうぞお上がりください」

玉環に案内され、珠華たちは店の一室に通された。火鉢が既に準備されていて、部屋の中はほんのりと暖かい。

「暖かい。ホッとする」

「珠華様は、志輝様に比べて寒がりですものね」

昔から珠華と志輝を知る玉環は、懐かしそうに笑みを深めた。

「うん、夏の方が好き。志輝は夏が苦手だけど」

「まあ、そうなのですか。存じませんでした」

「志輝は、暑かろうが寒かろうが涼しい顔してるからね」

そう言うと、すぐに横から小言が飛んでくる。

「珠華様が、いちいち口煩いんですよ。思ったことをすぐに口に出しますから」

「それはすみませんね」

杏樹に軽く睨まれ、珠華は肩を竦めてみせた。外套を玉環に預け、指先を擦り合わせながら椅子に腰かける。

「向こうでの生活はいかがですか」

「楽しいわよ。何よりね、仕事で海に出るのが楽しいの。心が躍るの。新しい人に、文化に出会えることが」

楽し気に弾む珠華の声に、玉環と杏樹は目尻を下げた。

「国を出ると聞いた時は心配しましたが、どうやら杞憂だったようですね」

「だから言ったでしょう？ 大丈夫だって」

「珠華様のその楽観的思考はどこからやってくるのやら」

溜め息をついた杏樹に、珠華は心外だと言わんばかりに口を尖らせた。

「行動を起こす前から尻込みしたって何にもならないじゃない。どうせなら楽しく物事を考えて生きていきたいわ。だって、一度きりの人生だもの」

珠華のあっけらかんとした迷いのない答えに、杏樹は額を押さえ、玉環は肩を揺らす。

「本当、志輝様とは正反対な性格なこと」

「あのね、杏樹。志輝はね、いちいち細かすぎるのよ。だからその分、わたしがこういう性格になったんだと思うの」

「あのですね、珠華様。“逆もまた然り”ということ、ゆめゆめお忘れなきように」

「はいはい」

「“はい”は一回で十分です」

「……はい」

珠華は手厳しい杏樹を尻目に、玉環が用意してくれた茶を頂くことにした。玉環も席について、ふと庭に視線を向ける。

「そういえばこの間、志輝様が来てくださったんですよ。それも、女性を伴って」

珠華は目を見開いて驚きの声を上げようとしたが、寸前でやめた。一人、思い当たる女性を知っているからだ。

「もしかして、雪花さん？」

「あら、ご存知でしたか」

「まあ、うん。そっか、ここに連れてきたんだ」

珠華は眩き、嬉しそうに笑みを口端に浮かべた。

「嬉しそうですね、珠華様」

「もちろんよ。……それにわたしね、少し心配してたの。志輝のこと」

「心配？」

「うん。心配というか、罪悪感かもしれないわ」

首を傾げる二人に、珠華は頷いた。緑のない寂しい木を見つめながら、言葉を続ける。

「わたしたち、ずっと一緒だったでしょう。性格は違うけど、互いの考えていることは手に取るように分かるのよ。今でも魂の片割れだと思ってる。多分、志輝も同じよ。わたしたち、二人で一つだったから。……でもね。外で色んな人と少しずつ関わって、わたしは志輝を置いて先に進んだわ」

珠華は左手の薬指に嵌めた指輪に触れた。

『志輝、わたしは先に行くよ』

世界の広さを教えてくれた、大切な人。愛しい人。志輝や杏樹、友人たちに抱く感情とは違う、特別な人。

「志輝はいつてらっしゃって背中を押してくれた。でも志輝は一人、紅家を背負い続けている。一族が認める有能さだけど、志輝だって息が詰まる時があるのよ。志輝はそういうこと、隠すのが上手いじゃない？ 隠すとか、悟られないようにするのが癖になっているんだと思う。周囲に隙を与えないようにしているから。だから、少しでも自分から感情を出せる相手ができたら嬉しい。……ま、翔や白哉には遠慮はないだろうけど」

珠華の言葉に、杏樹と玉環は顔を見合わせて笑った。

「珠華様、心配ご無用です」

「え？」

「少しどころか、雪花相手には大いに感情を出し始めていますから。こちらが呆れるくらいに、志輝様は色々としてかしていますよ」

「……しでかす。志輝が？」

珠華は目を丸くさせ、首を傾げた。

「ええ。あなたと同じで、興味を持ったら加減を知りませんから」

「言い方に棘があるんだけど、杏樹」

「身に覚えがおありでしょう」

「ないわ。わたしは恋した人を振り向かせるのに、必死に行動しただけだから」

「ですから、そういうところがそっくりなんですよ」

盛大な溜め息をついた杏樹を見て、玉環がさらに笑った。

「杏樹。今は嫌われていても、珠華様のように大逆転があるかもしれないわ」

「大逆転……。珠華様の場合は向こうが折れてくれたけど、雪花の場合は想像できないわ。あの娘、頑固で手強いわよ」

大逆転とはどういう意味だと抗議しようとしたが、この姉妹は話の花が咲くと止まらないことを珠華はよく知っている。珠華は諦め、頬杖をついて庭園を眺めた。

志輝は見つけた。自分を、ただの自分と認めてくれる人を。まあ、見つけたところでどうなるかは分からない。雪花とは切ることのできない因縁がある。たとえ雪花が志輝の存在を認めてくれても、それ以上の進展を望むことは間違っているのかもしれない。だがそれでも、志輝を応援したいと思う。もし、雪花が振り向いて志輝の隣を歩いてくれるなら――。

（その時は、援護に回るしかないなあ）

どうせ一波乱あることは目に見えている。一族は志輝を当主として認めているが、その伴侶もまた、一族が認める者でなければならない。それにあの養父――玄風牙がそう簡単に雪花を手放すとも思えない。隣国の王族、グレンも雪花に妙に執着している。

（頑張りなよ、志輝）

春になれば桜が咲き誇るように、明るい知らせを聞くことができれば良いのだが。

珠華は未来を思い描くように、そっと瞼を伏せた。